

関西学院大学 研究成果報告

2024年 5月 28日

関西学院大学 学長殿

所属： 社会学部
職名： 教授
氏名： 奥村 隆

以下のとおり、報告いたします。

研究制度	☒ 特別研究期間 ☐ 自由研究期間 ☐ 大学共同研究 ☐ 個人特別研究費 ☐ 博士研究員 ※国際共同研究交通費補助については別様式にて作成してください。
研究課題	<文化> としての社会学——「社会的なもの」をめぐるふたつの比較研究を通して
研究実施場所	自宅（東京都小金井市）および関西学院大学社会学部研究室
研究期間	2023年 4月 1日 ～ 2024年 3月 31日（12ヶ月）

◆ 研究成果概要 （2,500字程度）

上記研究課題に即して実施したことを具体的に記述してください。

本特別研究期間の研究の目的は、社会学を「社会的なもの」を表象する<文化>の一形態ととらえ、以下のふたつの比較研究を通して、その独自性を明らかにすることにあった。

（1）19世紀ヨーロッパに生まれた「社会学」は、さまざまな社会で展開を見せたが、日本の社会学を「日本文化」の一形態と考えることができるだろう。日本の社会学を、それぞれの社会の文化に根ざして発展した他の社会の社会学と比較することで、「日本文化」としてのその特徴を理解する。

（2）「社会的なもの」を表象する<文化>の形態は「社会学」にとどまらず、たとえば文学、演劇、芸能、美術、音楽、宗教なども独自の方法で「社会的なもの」を描き出してきた。こうしたさまざまな<文化>の形態における「社会的なもの」を把握し、「社会学」における表象と比較することで、「社会的なもの」についての新たな理解を獲得する。

このうち、研究目的（1）にかんしては、2023年度中に以下のことを実施した。

まず、2023年4月8日に開催されたシンポジウム「見田宗介／真木悠介を継承する」（於東京大学駒場キャンパス）で「磁場のユートピア／圏域のユートピア」を報告し、『思想』8月号（1192号）に同名の論文を発表した。ここでは、カール・マンハイム『イデオロギーとユートピア』（1929年）におけるユートピア論を継承して、1970年代以降の日本において「明晰なるユートピア」を構想しようとした見田宗介＝真木悠介が新たになにを切り開き、

いかなる問題点をもっていたかを、1971年、1996年、2006～18年の彼の論考をもとに考察した。

第二に、2022年度内に脱稿していた『社会学の歴史Ⅱ——他者への想像力のために』の刊行に向けた最終作業を進め、校正段階での検討により大幅な修正を行ったうえで、9月に有斐閣より刊行した。本書は20世紀後半の社会学史を辿ることを目的とするが、西欧と北米の白人男性のパースペクティブにとつての「他者」である女性や第三世界（「周辺」）の声がどのようにして社会学の世界に響くようになったかをとくに描こうとした。本書への書評が『ソシオロジ』2024年7月号に掲載されるにあたって、2024年3月に「書評に答えて」を執筆した。

第三に、編著『戦後日本の社会意識論——ある社会学的想像力の系譜』を11月に有斐閣より刊行した。本書は戦後日本社会において日本固有の社会学を生んだ16名の社会学者について検討したものであり、担当章である「鶴見和子——ふたつの言葉のあいだに」の執筆は2022年度に終えていたが、2023年度には編者として全体の編集作業と「編者まえがき」の執筆を行った。本書をめぐって2024年1月31日に有斐閣編集部において浜日出夫慶應義塾大学名誉教授と対談を行い、その記録が『書斎の窓』（有斐閣）2024年7月号に掲載される予定である。

第四に、2023年12月にフランス・リヨンのリヨン高等師範学校で開催された国際シンポジウム Post-Western Sociology: From East to Europeに参加して、Wanderers and the Settled: Perspectives of Kunio Yanagita and Kazuko Tsurumi on Social Change と題する報告を行った。本シンポジウムは日本、中国、韓国、フランスの社会学者たちがPost-Western Sociologyという新たなプロジェクトをめぐる討議を行うため12月12日・13日の2日間にわたって開催されたが、12月12日には自らの報告に続いて部会司会を行い、12月14日には今後の研究企画の進展を議論するワークショップに参加した。とくにこのワークショップでは、現代の日本、フランス、中国の社会学者がそれぞれどのような「社会的なもの」に問いを立て、いかなる「社会学」を構想しようとしているかの相違を、リアリティをもって感じることができた。

研究目的（2）にかんしては、いずれも準備段階にとどまるが、以下のことを行った。

第一に、戦後日本における社会学の展開に決定的な役割を果たした1920年代前半生まれの世代（作田啓一、中野卓、森岡清美など）と同世代の哲学者・鶴見俊輔（1922～2016）、文学者・遠藤周作（1923～1996）が「転向」や「転び」について考察した論考を比較検討することである。鶴見は『共同研究 転向』（1959～62年）の諸論考で戦前の日本における急進主義者の「鋭角的転向」、自由主義者の「鈍角的転向」ないし「偽装転向」を論じ、遠藤は『沈黙』（1966年）、『切支丹の里』（1971年）などで日本における「転びバテレン」「隠れキリシタン」について、『イエスの生涯』（1973年）、『キリストの誕生』（1978年）などでイエスを否認した弟子たちについて論じた。これにかんして「ふたつの「転向」論——鶴見俊輔と遠藤周作における」という論考を準備したが、2023年10月27日に「文と芸の社会学研究会」（於龍谷大学大阪梅田キャンパス）において鶴見にかんする報告を行うにとどまった。今後、遠藤についての研究を進めて本論考をまとめるとともに、これを一部とする単著の執筆を進めたい（出版社と企画を進めている社会学シリーズの1冊として2025年に刊行の可能性がある）。

第二に、アメリカのミステリ小説家であるパトリシア・ハイスミス（1921～1995）の作品を本研究期間の最後2ヵ月に精読し、その評伝などの資料の検討も進めた。『見知らぬ乗客』（1950年）、『太陽がいっぱい』（1955年）などで知られるハイスミスの小説の重要なテーマは、「とりかえがきく生」がいわばその「分身」ともいえる他者と出会い（多くの場合男性同士）、脱出できない関係にお互いに巻き込まれていくことであるが、ここからいかなる「社会的なもの」を抽出できるかを今後考えていきたい。これについては論文の構想を練っている段階だが、できれば「文と芸の社会学研究会」の成果を編集した単行本に1章として寄稿したいと考えている（刊行時期、出版社などは未定）。

さらに、『慈悲のポリティクス——モーツァルトのオペラにおいて、誰が誰を赦すのか』（2021年、岩波書店）で論じたオペラにおける「社会的なもの」について、リヨンでのシンポジウムの前後（12月11日・14日）にパリ・オペラガルニエ宮を訪れて視察を行うとともに、ラヴェル、リヒャルト＝シュトラウス、ヤナーチェクなど20世紀のオペラを検討し始めた。ただ、現段階では今後の研究へと展開するアイデアの核をつかむにはいたっていない。

なお、本研究期間中に、1998年に刊行した『他者という技法——コミュニケーションの社会学』（日本評論社）の文庫化の企画が進行し、加筆修正を行ったうえで、2024年2月にちくま学芸文庫から刊行された。この刊行のための作業のなかで、過去の自らの論考を読み直し、「自己と他者」をめぐる問題意識を新たにした。25年前のこの作品の延長上でどのような展開が可能かを考えるという課題を今回のサバティカルで獲得したことも、最後に付言しておきたい。

以上

提出期限：研究期間終了後2ヶ月以内

※個人特別研究費：研究費支給年度終了後2ヶ月以内 博士研究員：期間終了まで

提出先：研究推進社会連携機構（NUC）

※特別研究期間、自由研究期間の報告は所属長、博士研究員は研究科委員長を経て提出ください。

◆研究成果概要は、大学ホームページにて公開します。研究遂行上大学ホームページでの公開に支障がある場合は研究推進社会連携機構までご連絡ください。